

俳句、その滑稽の歴史

日根野 聖子

俳句のルーツは俳諧であり、その本質は「滑稽」である。しかし、現代俳句において滑稽は異端児扱い、悪句の根源であると眉をしかめる俳人もいる。これは一体、どうしたことが。「私は俳句をやっています」、「私は俳人です」と言うならば、その「俳」の意味を確認し説明できなければと思う。俳句は、俳句と名乗る以上、DNA鑑定をしたら、滑稽という遺伝子のあることが分かるはずである。師系が違ふとか所属結社が違ふとか、そんな浅い歴史の話ではない。俳句は、俳諧より起こり、「俳」は滑稽を意味する。俳句の歴史を一度、概観してみたい。

俳句の出生は、室町時代の「俳諧の連歌」にまで遡る。俳諧の連歌は、俳諧と略称され、俳諧の字義通り滑稽を中心とする連歌であった。一方、和歌の伝統や雅を求める連歌は「本連歌」といったが、俳諧は元々は、この本連歌の余興であり、その場限りの詠み捨ての軽いものであった。ところが、下克上の世を経て、中下層階級が台頭したことで、形式にこだわらない俳諧の popularity が高まり、室町時代末期、一四九九年には日本最初の俳諧撰集「竹馬狂吟集」がつくられた。詠み捨ての余興が書物となり、ここで初めて文学として認知されるようになったのである。「竹馬狂吟集」には、発句のみが収録されている巻があり、この頃、既に発句のみが詠まれていたことが、この俳諧集から窺知されるのは、興味深いことである。

俳諧の連歌は俗を扱い、民衆の popularity を得てますます盛んになり、一五二五年には「犬筑波集」(山崎宗鑑)、一五四〇年に「守武千句」(荒木田守武)が編まれた。この宗鑑、守武の俳諧の連歌は、近世初頭、松永貞徳に

よって受け継がれ、俳諧という一つの新しい文芸として独立し、全国に流布していった。俳諧は、町人社会、特に京都において盛んとなり、貞徳一派の俳諧は貞門俳諧と呼ばれた。貞門俳諧では、縁語や掛詞を使い、故事・古歌を利用して滑稽味を詠出したが、ともすると言語遊戯に陥り、固定化した作風は、しだいに新鮮さを失っていった。

未熟な言語遊戯に飽き足りず、貞門俳諧に対抗して登場したのが、西山宗因を中心とする大阪の一派、談林俳諧であった。貞門が根底においては和歌・連歌の道を外れるものではないという立場をとり、言語上での新しい笑いを目指したのに対して、談林は、より自由で大胆な表現を求めた。貞門より幅広い用語や斬新な比喻を用い、世相や風俗も積極的に取り上げていった。しかし、革新的な俳風で一世を風靡したかに見えた談林も、結局は伝統破壊に急で、芸術性を追求することができず、言語遊戯という枠を出ることはできなかった。自由、大胆さゆえの破格も横行し、やがては行き詰まりを呈するようになっていった。

俳諧は、貞門の言語による滑稽から、談林の様々な表現方法や風俗を取り入れた滑稽へと進化した。しかし、いずれの俳風にも満足せず、これらに内省と疑問を呈し、俳諧により高い芸術性を求めて、ここに一人の天才が登場する。